

地域に飛び出す市民国際プラザ!

『市民国際プラザ』では、国際協力や多文化共生に関する自治体、地域国際化協会、NGO/NPO等のための連携相談を行っています。更に、各地の**先進的な活動**を実際に取材したり、情報収集を行い、本ダイジェストでご紹介しています。

○ 特定非営利活動法人CHARM 2019年3月4日 場所：大阪府大阪市



「すべての人が健康に過ごせる社会をめざして」

大阪市の住宅街にあるアットホームな一軒家。ここが特定非営利活動法人CHARM (Center for Health and Rights of Migrants) の拠点です。設立は2002年。90年代以降、日本で働く外国人が来日後にHIV陽性の診断を受けるというケースが生じ、在留資格や生活などの支援に伝える必要がCHARMの設立につながりました。その後HIV診療を受ける際の通訳派遣や外国語によるエイズ電話相談を始め、その後、結核の治療における通訳派遣も行うようになったほか、言語面でのサポート以外の支援 (カウンセラーの派遣やHIV陽性者の交流の場の提供、居場所づくりなど) にも活動の幅を広げてきました。支援の主体は、近畿地方で活動する医療関係者やソーシャルワーカーのネットワークです。そのネットワークを支えているのが、事務局長の青木さんと事務局スタッフ。青木さんご自身は、もともと横浜のNGOでボランティアとして外国人支援にかかわった後、フィリピンで保健医療を学び、大阪でCHARMをスタートさせました。柔らかな語り口ながら強い想いをお持ちであることが伝わってきます。大阪の医療通訳の制度はまだ課題が多いようですが、現在は母子保健において支援体制の構築を進めるべく、行政への働きかけを行っていらっしゃるとのこと。医療のバックグラウンドがないと謙遜されていらっしゃいましたが、専門家の知見や協力を仰ぎ、多くの方を巻き込んでこられた青木さんがいらっしゃったからこそ、ここまで強固な支援者ネットワークができたのではないかと感じました。日本で暮らす外国人住民が増えるということは感染症以外にも様々な課題が生じる可能性があるということです。その中で様々な関係者がつながること、ノウハウを共有すること、そして何より青木さんのような人と人をつなぐことのできるコーディネーターの存在が今後ますます必要になってくるのではないのでしょうか。



↑温かみのあるCHARMのパンフレット。一軒家のイラストも。



○ 公益財団法人神戸国際協力交流センター

2019年3月4日 場所：兵庫県神戸市

国際貿易都市・神戸市の地域国際化協会

三宮の海岸沿い、高層ビルの2階に神戸国際協力交流センターはあります。部屋の中に入るとまずその熱気に驚きました。センターの日本語学習サポートは6カ月のマンツーマン。訪問時にも、十数組の日本語学習者と日本語ボランティアが熱心に学習に取り組んでいらっしゃいました。それ以外にも自習スペースで自ら勉強する人たちの姿も見かけました。資料スペースも充実しており、多くの外国人住民が立ち寄る場となっていることが伺えます。

年間の相談件数は420件、電話での相談は1万件にも上るそうです。そのほかにも7言語による生活情報の提供を行っています。また、国際協力事業も継続的に行っているのが神戸国際協力交流センターの特徴です。支援先はアジア諸都市の行政官を主な対象としており、直近5年間ではベトナム、インドネシアとカンボジアなど。クレアのモデル事業も活用しており、現在は、カンボジアの小学校教員養成校に教員OBを派遣して効果的な教授等を指導する事業にも取り組んでいます。今年度からは、多文化共生総合相談ワンストップセンターにもなるとのこと。神戸国際協力交流センターのさらなる発展が期待されます。



↑手前が自習スペース。奥ではマンツーマンで日本語の学習をしています。

○特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター (KFC)

2019年3月4日 場所：兵庫県神戸市

3 すべての人に
健康と福祉を



「何歳であっても、健康で、安心して満足以暮らせるように」

阪神淡路大震災後、日常的に外国人支援に取り組むため設立された神戸定住外国人支援センター (KFC)。様々なバックグラウンドを持つ住民が暮らす国際貿易都市・神戸での取組み、特に、全国でもまだ珍しい高齢者の支援についてお話を伺いました。

KFCの支援対象は子どもから大人まで、その内容も多岐に渡りますが、その中でも高齢者支援事業は、デイサービスやグループホーム、訪問介護等を提供し、介護職スタッフ含め50名が働く根幹事業です。もともとは在日コリアンの高齢者を対象としたデイサービスからスタートしましたが、現在の利用者は中国残留邦人帰国者、日本人、日系ブラジル人、第三国定住難民のベトナム人にまで広がっています。高齢になれば日本での居住期間も長くなり、生活にも慣れて、特別な支援は不要では？と思われる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、日本にやってきた経緯は皆さん様々。全員が若い頃に日本にやってくるとは限りません。加えて、日本の生活に慣れていたとしても、高齢になると日本語を忘れてしまうというケースもあるそうです（若いころの記憶が鮮明になるのは日本人の高齢者も同様です）。お話を伺った呼和徳力根（ふふでるげん）氏（呼和徳力根氏はもともと内モンゴル自治区からの留学生で中国語話者であるため中国残留邦人帰国者の担当をいらっしゃいます）が、「一般成人以上に、社会、文化、言語のバックグラウンドへの丁寧な配慮が必要」と仰っていたのが印象的でした。その配慮の一つとして、オーストラリアの例を参考にデイサービスの利用日を国籍別に分けることで、バックグラウンドを考慮したサービスを行っています。実際に、様子を拝見させて頂きましたが、急な訪問者である私たちを皆さん笑顔で迎え入れて下さり、デイサービスでの時間をリラックスして楽しんでいらっしゃる様子が伝わってきました。また、もう一つ印象的だったのが立地です。「ハナの会」は駅前の新しいビルに入居しています。利便性が良いことはもちろんのこと、立地のいい場所にあるということが利用者の精神面での配慮にもつながる、というお話でした。高齢者であること、マイノリティであることは決して隠すべきことではなく、「大切な存在」だというメッセージを「立地」を通して伝えているとのことでした。バックグラウンドの多様性や心の声に耳を傾けることの大切さを強く感じました。



↑デイサービス「ハナの会」の入口。自然光の入る明るい中庭に面しています。

○「災害時の連携を考える全国フォーラム」の分科会にクリアが登場します

11 住み続けられる
まちづくりを



全国災害ボランティア支援団体ネットワーク (JVOD) 主催の第4回「災害時の連携を考える全国フォーラム」が、5/21 (火)・22 (水) に開催され、初日 (5/21) の分科会に、クリアと市民国際プラザ、難民支援協会 (JAR) の企画「災害時の外国人支援～これまでの取組と今後の課題～」が登場します！コーディネーターに難民支援協会の鶴木さん、パネリストに多文化共生マネージャー全国協議会の土井さん、熊本市国際交流振興事業団の勝谷さんをお迎えして、クリアの多文化共生部長とともに語り合います。災害時外国人支援の実践者から直接話が聞ける貴重な機会です。ぜひご参加ください。詳しくは、第4回「災害時の連携を考える全国フォーラム」のWEBサイト (<http://jvoad.jp/forum/#department>) をご覧ください。(申し込み締切：5月7日)



～市民国際プラザを広く皆様に知っていただくために～

市民国際プラザのFacebookに「いいね！」をお願いします！

